

「見えない力」を言語化すると、 生徒の意識や行動が変わる

岡山大学教育推進機構 准教授 **中山芳一**

なぜ今、「見えない力」が注目されているのか。「見えない力」を生徒に育むために、学校にはどのような指導・支援が求められるのだろうか。自制心や、やり抜く力などの「見えない力」に関する著書を多く出版し、その育成のための教育の重要性を積極的に発信している岡山大学教育推進機構の中山芳一准教授に聞いた。

「見えない力」が注目されている理由

「見えない力」は
思考・行動として「見える」

現行の学習指導要領で整理された資質・能力の3つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等」の育成や評価で苦労されている先生方は多いと思います。その要因の1つは、そうした資質・能力は、客観的に測ることが難しい「見えない力」だからです。

多くの学校では、グラデュエーション・ポリシー（以下、GP）に、「リ

ーダーシップ」や「問題解決能力」などを掲げていますが、そうした資質・能力もまさに「見えない力」です。「見えない力」であるからこそ、「GPとして定めた資質・能力を、日々の教育活動で育むことができているか？」と問われた時、「育むことができている」と明言することができない教師が少なくないのは当然のことだと言えます。知識・技能の習得状況は、ペーパーテストで客観的に評価することができます。ところが「見えない力」は、ど

なかやま・よしかず 岡山大学教育学部を卒業後、学童保育の指導員に。その後、岡山大学大学院教育学研究科へ進み、教育方法を専攻。岡山大学では、キャリア教育や課外活動支援を担当するとともに、非認知能力を育成するための教育実践の重要性を積極的に発信し、小・中学校、高校、幼稚園、保育園の教育活動の組織的改善にも取り組む。著書に、『教師のための「非認知能力」の育て方』（明治図書出版）、『家庭、学校、職場で生かせる！ 自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』（東京書籍）など。



なぜ育む? 「見えない力」

の程度身についているかが客観的に捉えづらいものです。上限を定めることはできず、「満点」という概念がないため、「この生徒の粘り強さは100点満点中85点だ」などといった形で点数をつけることもできません。

「見えない力」は、人がどのように考え、行動するかによって、その力をどの程度有しているかが分かります。例えば、場の雰囲気や和ませることがができる生徒は、「コミュニケーション能力が高いと評価することができません。しかし、「見えない力」の評価は、状況や場面に依拠します。同じ発言でも、状況によっては、「周囲の心情を慮れない」などと、むしろ「コミュニケーション能力が低いと評価されてしまいます。また、親しい仲間がいるクラスでは場を和ませることができけれども、地域の人たちなど、初めて会う人がいる場では態度が一変するようでは、コミュニケーション能力が高いと評価することはできないでしょう。

つまり、状況や場面に応じて、一定のパフォーマンスを発揮することができて初めて、そうした力を有していると評価できるわけです。そのため、多様な年齢、立場の人たちと多様な教育活動をする学校であればあるほど、「見えない力」が見える機会が多いのでは

ないでしょうか。

社会の変化を受けて「見えない力」が重要に

「見えない力」の育成は、これまでの日本の学校教育でも大切にされてきました。そして、その重要性は、社会の変化とともにますます高まっています。

その背景の1つが、テクノロジーの進化です。私は「学びに向かう力、人間性等」はコンピュータのOS（オペレーティングシステム）であり、「思考力、判断力、表現力等」はCPU（中央演算処理装置）であると考えています。生成AIの登場などにより、私たちは大量で多様な情報を比較・分析し、適切に判断することが求められるようになってきています。そこで機能するのが「思考力、判断力、表現力等」というCPUです。そして、よりよい納得解を探し続けることも求められています。そこで機能するのが「学びに向かう力、人間性等」というOSです。グローバル化が進展し、多様な価値観を持つ人たちとともに、地球規模の課題に向き合う必要性が高まっていることも、CPU、OSの性能の向上が求められている要因になっています。

「見えない力」の育成のポイント

具体的な行動指標として「見えない力」を言語化

多くの学校では、「見えない力」の育成を校訓などで掲げていますし、近年はGPとして、「見えない力」の育成を標榜する学校も増えています。しかし、教育目標として掲げてはいるものの、それが具体的な教育活動の変化・充実につながっている実感が持てず、「絵に描いた餅で終わっていて、育成・評価できていない」と感じている教師も少なくないようです。

それは、「見えない力」が見えないままになっていることが原因なのだと思います。「見えない力」は見える化することで、育成・評価することができるようになるのです。

例えば、「レジリエンスを育成する」というGPがあると思います。教師は授業など、様々な機会ですべてに「困難に直面しても、乗り越えていこう」となどと訴えます。しかし、そのようなメッセージだけでは、見える化は十分とは言えません。

そこで教師間で、「生徒がレジリエンスを発揮した場面と、その時の生徒

の姿はどのようなものだったか」を振り返り、言語化していきます。教科の授業や探究学習、特別活動など、様々な場面での生徒の姿を具体的に描写していくことで、「自校の生徒ならではのレジリエンスを発揮する時の姿」が見えてきます。そして、「困難に直面した時に、臆することなくOSを出し、他者の支援を受けながら、状況を少しずつ改善できること。また、そうしたことを喜びと感ぜられること」などと言語化し、それを生徒に伝えていくことで、GPが「自分もそうになりたい」といった行動指標となります。

行動指標があることで、教師は「生徒は困った時に周囲に助けを求めているか」「ちょっとした改善を成果として自覚できているか」などと、生徒を支援する要所を理解することができまします。また、教育活動の中に、「見えない力」を発揮する場面を意図的につくりやすくもなるはずです。

メタ認知によって自ら

「見えない力」を評価する

生徒に「自分もそうになりたい」とい



った具体的な行動指標が浸透すると、生徒は自分の行動のモニタリング(自己認識)と、コントロール(自己調整)が可能になります。つまり、ルーブリックなどを基にした日々の振り返りによって、行動指標の到達度をモニタリングし、目標との間にズレがあった場合は修正するなどのコントロールを行うこととなります。

「見えない力」のモニタリングと

ントロールには、メタ認知の力が欠かせません。「メタ」は「超越した」「高次の」という意味で、メタ認知は、今の自分をもつ一人の自分が客観的・俯瞰的に見ることです。

人は、メタ認知の力を働かせることで、体験したことに自分なりの意味づけをすることが出来ます。「いつ、何をしたか」という活動の記録にとどまることなく、その活動は自分にとってどんな意味や価値のある経験だったのかをモニタリングすることで、「次はこうしてみよう」などと自分をコントロールすることが出来ます。そうして、「見えない力」を伸ばしていくのです。

生徒がメタ認知の力を働かせ、「見えない力」を伸ばすために、教師ができる支援はいろいろあります。例えば、生徒の振り返りに対して、教師が「次は(も)こうしてはどうだろう」などと助言し、将来に向けた改善策と一緒に考える「フィードフォワード」も、生徒が「見えない力」を自己評価し、高めていく有効な方法です。

ある場面で獲得した「見えない力」は、別の場面でも発揮することが出来ます。例えば、学校行事を通じて培われた「見えない力」は、メタ認知することで、受験勉強などの別の場面でも発揮しやすくなります。現場の先生方

は、3年生の夏まで部活動に打ち込んだ生徒が、受験勉強で大きな力を発揮する姿をよく見てきたと思います。それも「見えない力」の発揮にほかなりません。目標に向けて努力した、自分の弱点を克服した、メンバーと協力したといった様々な経験の中で、どのような力が育ち、発揮されていたのかを生徒とともに言語化し、行動指標が生徒の内面で習慣化するように支援してあげてほしいと思います(図)。

学校全体で取り組んで互いに高め合う集団を育む

「学びに向かう力、人間性等」などは、幼児期にその土台が醸成されるため、高校時代に育成するのは難しいのではないかとこの質問を受けることがあります。確かに人は、生来の気質を基に乳幼児期から人格が形成されていきますが、成長して脳が発達することにより、意識して高められる力も少なくありません。例えば、セルフコントロール(自制心)はその最たるもので、子どもの頃に落ち着きのなかった人が、成長するにつれて状況に合わせた行動ができるようになる姿は多く見られます。協調性を始めとする社会性に関する力も、年齢を重ねていく中で高まっ

ていきやすい側面があります。

GPなどを具体的な行動指標とし、その習慣化を支援する環境ができると、生徒たちは日々の学校生活の中で、行動指標などについて語り合うようになります。そうして共通の目標に向かって高め合う集団が形成されるとともに、居心地のよい一体感の中で、生徒一人ひとりが自分の持つ「見えない力」を思う存分発揮することができる学校になっていくはず。

図 「見えない力」を生徒に育むための教師の支援

- 1 「見えない力」を具体的な行動指標として言語化する**
「見えない力」を発揮する生徒は、どんな場面でどんな行動をしているかを言語化
- 2 教育活動の中で行動指標の実現を支援する**
生徒が「見えない力」を発揮しやすい場面をつくったり、声かけなどを通して行動を促したりする
- 3 メタ認知の力を働かせ、行動指標に基づいた自己評価をさせる**
「見えない力」が発揮できたことを、対話を通じて生徒に実感させ、習慣化させる

※中山准教授への取材を基に編集部で作成。



ベネッセ教育総合研究所
主任研究員
岡部 悟志
おかべ・さとし

知能検査や学力テストで測定される力は、認知能力と呼ばれています。それに対して、自制心や好奇心、協調性、やり抜く力などの情緒や社会性に関する能力は、非認知能力と呼ばれています。非認知能力は、OECDが個人の幸福(ウェルビーイング)と社会の発展を牽引する技能として、その重要性を提唱する「社会情動的スキル」とほぼ同義と考えられます。

非認知能力は、よりよい人生を送るために必要な資質・能力として注目されています。幸福度の向上や身体的健康の増進、反社会的な行動の減少など、生涯にわたって大きな恩恵をもたらすことが、様々な研究によって明らかになっています。

近年は、日本でも非認知能力の認知が広

Column

「見えない力」とは何か、「見える力」との関係は

世界的に注目される「見えない力」

がり、特に幼児教育において注目が集まっています。ベネッセ教育総合研究所の研究でも、幼児期の生活習慣が学びに向かう力の成長の土台になっていることが示唆されています。(幼児期から中学生の家庭教育調査・縦断調査)

非認知能力と認知能力は互いに影響し合う

非認知能力と認知能力は、別々に伸びるものではなく、互いに影響し、補完し合う形で発達すると考えられています。

前掲のベネッセ教育総合研究所の調査では、幼児期に育まれる好奇心、協調性、自己主張、自制心、頑張る力といった非認知能力が、小学校からの学習態度に影響を及ぼすことが分かっています。また、高校生を対象とした別の調査を用いて、粘り強さや挑戦心といった非認知能力と成績にどのような関連があるのかを分析したところ

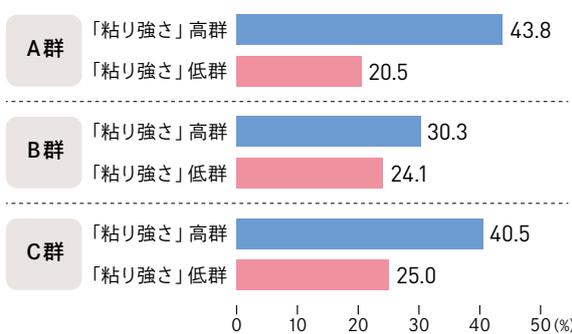
図1 高校生における非認知能力と認知能力の関係



いずれの学年でも、非認知能力である「粘り強さ」「挑戦心」の高い生徒ほど、成績が高くなる結果が見られた。

※「粘り強さ」は「一度決めたことは最後までやり遂げる姿勢」、「挑戦心」は「難しいことや新しいことにいつも挑戦したい姿勢」を示す。
※数値は相関係数。いずれも1%水準で有意である。
※出典 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2021-2023」

図2 3年次の成績上位層の比率
(高校のタイプと粘り強さの状況別)



いずれのタイプの高校でも、入学時点の「粘り強さ」が「高群」の生徒は、3年次に成績上位層に入る割合が高くなっている。

※高校のタイプは、卒業生の進路が「国公立大学や難関私立大学への進学者」が多い高校をA群、「中堅レベルの大学への進学者」が多い高校をB群、「専修・専門学校への進学、就職や就職希望者」が多い高校をC群とした。
※出典 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2021-2023」

(図1)、どの学年でも、粘り強さや挑戦心が高いほど成績も高いことが分かり、両者に相関があることが確かめられました。

高校入学時点の非認知能力の高さが、3年次の学習成績にどのように影響するのかについても分析しました(図2)。その結果、入学時の学力は同程度であっても、粘り強さが高い生徒ほど、3年次に校内で成績上位層に入る割合が高いことが分かりました。卒業生の主な進路が異なる3タイプの高校のいずれも同様の結果でした。

高校時代においても、非認知能力の育成は、認知能力の育成にも好影響をもたらすと考えられます。